物語り論からみた環境意識プロジェクト

古川剛史（京都大学）・永田素彦（京都大学）
Motohiko.nagata@at8.ecs.kyoto-u.ac.jp

1．住民ー専門家コミュニケーション

地域の自然環境の現状を理解し、将来を構想していくためには、住民と専門家の対話を通じた共同が不可欠である――このことは現在ほぼ共通理解となっている。同じ具体的な環境を、専門家は各々の専門領域に応じて専門用語（科学的言説）を用いて抽象し、住民は各々の関心や関わりに即して日常語（日常的言説）を用いて抽象している。従来、住民と専門家の対話においては、後者によって得られる知識を、前者にわかりやすく伝えることが目指されていた。その背景には、専門家が専ら正しい知識や適切な行動選択肢を提供できるとする、専門家主義の考え方があった。しかし専門家主義が行き詰まりをみせる現在においては、さらに進んだ形での住民と専門家の対話が求められている。つまり、両者がそれぞれ日常的言説、科学的言説を用いて抽象している環境像を、双方向的な対話を通じて一つの具体的な環境像へと上向させることが求められている。

総合地球環境学研究所のプロジェクト「流域環境の質と環境意識の関係解明」（環境意識プロジェクト）は、このような住民と専門家の対話を実現する手法を開発する試みの一つである。具体的には、住民の流域環境に対する関心や価値評価を把握し（関心事調査）、流域環境の様々な質の変化を自然科学的指標により定量的に予測し（応答予測モデル）、両者の成果を盛り込んだシナリオアンケートを実施することを通じて、どのような環境の変化を住民が懸念しているのか、住民の環境意識に影響を及ぼしている環境の質はどのようなものかを解明していくことを目指している。

そのための中心的なツールとして開発が進められてきたのが、「変換モジュール」である。変換モジュールは、アンケートやインタビューによって収集された、人々の環境についての関心やイメージを、自然科学的な指標で定量的に把握できる環境質の組み合わせに「翻訳」する仕組みである。具体的には、人々の環境についてのイメージを「オブジェクト（モノ）＋プロパティ（属性）」形式で表現する。そして、日常言語で表現されているプロパティを、自然科学の指標で定量的に表現できるプロパティとして表現し、かつ、日常言語で表現される定性的なプロパティと、自然科学の定量的なプロパティを対応させる変換条件を設定する。例えば、「きれいな水」という日常的イメージは、「きれいな（プロパティ）＋水（オブジェクト）」と表現できる。この「きれいな」というプロパティは、自然科学的な指標に置き換えると、水の「透明度」（というプロパティ）がある値（X）以上をとることに対応しているとみなせる。この場合、変換条件は、「水：透明度＞X」のように表現される。このような変換条件の集合によって、環境についての日常的言説と科学的言説をつなぐことができる。

2．物語り論

本節では、住民（日常的言説）と専門家（科学的言説）の対話を概念化する枠組みとして、

野家（2005）（「物語り行為による世界制作」）の物語り論を紹介する。物語り論によると、日常的言説と科学的言説は、「人称的言説—没人称的言説」の軸に位置づけられる。

物語りとは、複数の出来事を時間的に組織化する言語行為である（物語りという言語行為の産物を、物語と呼ぶ）。物語り論の観点からは、世界は事物の総体ではなく、出来事のネットワークとしてとらえられる。各々の出来事は、一定の時間的広がりをもつとともに、先行する出来事（原因）、後続する出来事（結果）と結びついている。ここで原因—結果関係は、物理的因果関係に限らず、より広い意味での因果関係（物語り的因果関係）を意味する。たとえば、ピッチャーの投球動作（という出来事）が開始されるのは、キャッチャーのサイン（という原因）に促されてのことであり、サヨナラホームランを打たれる（という結果をもたらす）かもしれない。さらに、この原因—出来事－結果全体を、「キャッチャーのサインミスにより敗戦した」という出来事として記述することもできる。このように、出来事は相互に入れ子構造をなしており、ひとつの出来事を同定しようとすれば、何を原因とし何を結果とするかをめぐって、それを確定する視点と文脈が要求される。この視点と文脈を与えてくれるのが、物語りにほかならない。そこには、誰が言ったかによって、物語の内容や妥当性が左右されるという、人称性が介在する。

ちなみに、自然的な出来事であっても、その同定には視点と文脈が—つまり、物語りが—必要であることに変わりはない。たとえば、自然界に「冷夏」と「暑夏」の区別がアプリオリにあるわけではない。「冷夏」が出来事として認知されるのは、それが冷害や米不足といった人間的出来事と結びついて一つの物語を構成しうるからであり、それを離れて自然界に「冷夏」が存在するわけではない。このように自然的出来事が位置価をもちうる人間的関心の文脈こそが、物語りにほかならない。物語りの中に位置価をもたない自然現象は、認知されることすらできない。

ところで、自然科学的説明も、複数の出来事を因果的に結びつけるという点では、物語り的説明の一つとみなしうる。しかし、自然科学は、万人にとって理解可能な事実の解明を目指す。したがってそれは、特定の視点から世界の見え方や感じ方を排除せざるをえない。自然科学の目覚ましい普遍性と客観性は、物語りから人称性をあたう限り排除することによって獲得されたものである。つまり、自然科学の説明は、没人称的な物語りということができる。

3．物語り論と環境意識プロジェクト

物語り論の観点からすると、環境意識とは、環境についての物語りにほかならない。それは、環境についての人々の日常的な言説（人称的言説）と、環境についての自然科学的説明（没人称的言説）の双方によって構成される物語りである。変換モジュール作成の作業においては、アンケートで収集されたキーワード（人称的言説）を、変換条件（没人称的言説）という形で把握しようとしてきた。この作業のアウトプットは、人々の人称的言説を利用した、専門家による新しい没人称的物語りと捉えることができる。この没人称的物語りが、人々の人称的物語りの中にどのように繰り入れられていくのかが、環境意識プロジェクトの一つの焦点になるだろう。